

弥生時代の副葬に見られる 玉類の呪的使用とその背景

小寺 智津子

1. はじめに

人の葬送に際して死者に何かを添える、という行為は有史以前から行われてきた。古代の日本でも、副葬品として様々な品々が添えられている。この副葬品本体やその組み合わせ、配置、副葬方法などは、当時の人々が死をどのようなとらえていたかを考察する、数少ない雄弁な手がかりとなる。

古代日本の副葬品の中で玉類は、縄文・弥生・古墳を通じて副葬品として選択されてきた。古代の日本では玉類には呪的な力が存在すると考えられており、装身具としての使用¹⁾だけでなく、呪的な（または呪的な儀礼を伴う）使用も多く観察されている。副葬品を含めた葬送に際する様々な行為の中で、呪的な行為は特に死者に対する意識をより顕著に示すものである。玉類は古代日本の死者への観念やその変化を追うにあたり、まさに重要な手がかりとなろう。

古代日本における玉類の呪的使用の代表例が「玉の緒を切った」と表現される玉類の配置である。これは葬送時に主に棺内の広範囲に、玉類を意図的に散在させた状態を示している。この「玉の緒を切る」とされる葬送儀礼は古墳においてしばしば観察されることが報告されており（後藤 1940・椋山 1972・伊藤 1989・玉城 1994他）、この儀礼はその後の古代日本に見られる「玉の緒」という観念と結びつくものと解釈されている。この「玉の緒を切る」という玉類の呪的儀礼は弥生時代に始まったようであるが、その初現や地域的な変遷、広がりなどについては研究されていない。

今回研究対象とする弥生時代は、古墳時代に比べると玉類の呪的使用について研究が行われていない。しかし「玉の緒を切る」儀礼も含めて、様々な

形態をとった玉類の副葬がなされている。その玉類の配置は多様性に富み、時代や地域によって大きく異なるものである²⁾。まず弥生時代の副葬³⁾に見られる玉類の配置について簡単に概略をまとめ、そのなかで呪的な意図が推測される玉類の配置—「玉の緒を切る」という行為も含めて—を抽出・検討し、最終的にはその背後にある弥生人の死者に対する意識を考察したい。

2. 弥生時代の墓に見られる玉類の配置

筆者が資料集成・分類を行ったのは、現在の西日本を中心としており、具体的には北部九州・山陰・山陽・四国・近畿・北陸である⁴⁾。弥生時代に観察される玉類の副葬配置を表1のように設定し、分類を行った。この分類は小寺（2005）の分類を改変したものである。以下分類の説明を行う。

表1 副葬に見られる玉類の配置

A	棺内 (棺底)	a 着装	着装と推定される形状・位置で出土しているもの a1; 首飾り a2; 頭飾り a3; 手玉(腕輪) a4; 耳飾り a5; 耳飾りor頭飾りに伴う垂飾りか曖昧なもの
		b 集中	身体があったと思われる位置で、狭い範囲に密集して出土し、かつ配列が推定できないもの b1; その集中状態が意図的と考えられるもの b2; 意図の有無を判断できないもの
		c 散在	棺内の広い範囲で散在して出土しているもの
		d 添え置き	棺内の遺体周辺と考えられる位置に、集中して置かれた状態を保って出土しているもの
		e 胸部配置	推定頸部から胸部にかけて1～数点の玉が出土しているもの
		f その他	a～fに当てはまらないもの
		g 不明	出土状況が不明なもの
B	棺外 (墓壇内)	a 集中	棺上または墓壇内にまとめて置いた状態で出土しているもの a1; 棺上 a2; 墓壇内
		b 散乱	レベル差を持って散乱して出土しており、棺上または墓壇内に撒いたと考えられるもの
		c 埋め込み	棺の目張り粘土や墓壇の側壁に埋め込んだ状態、または棺材の下と思われる位置で出土したもの
		d 墓壇上	墓壇を埋め戻す途中に玉を置いたと考えられるもの
		e その他	a～dに当てはまらないもの
		f 不明	出土状況が不明なもの

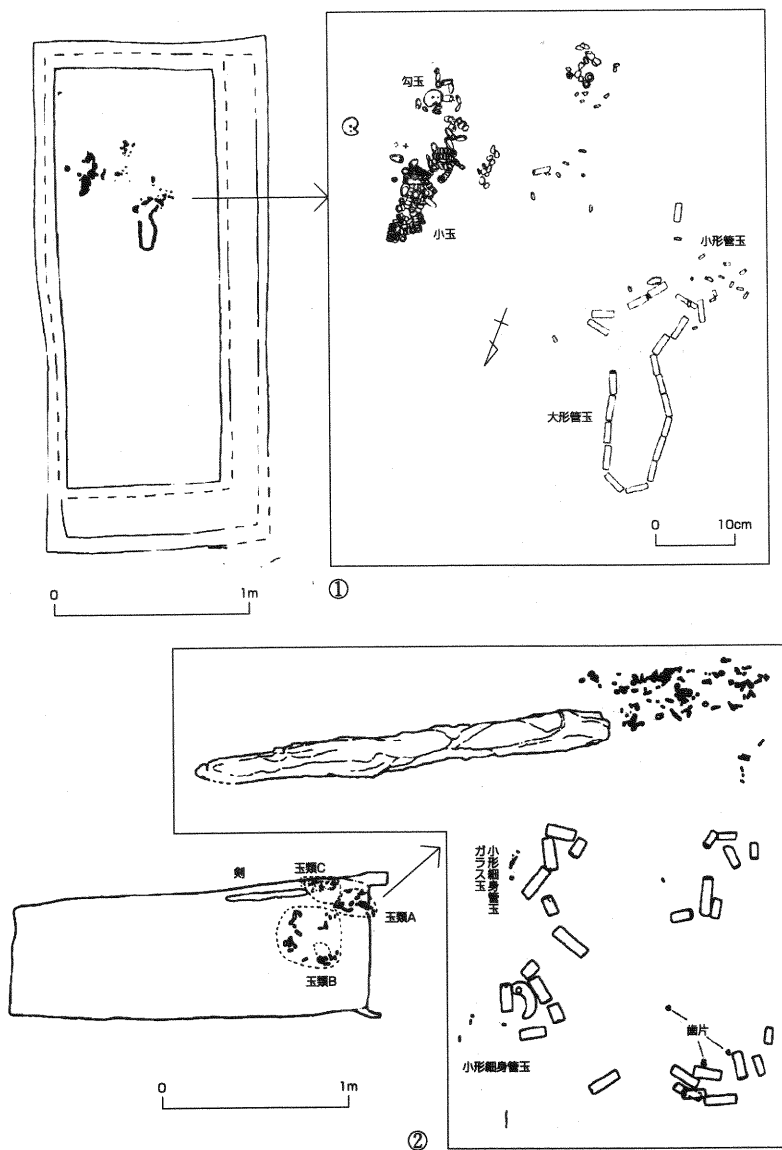


図1 ①西谷 3号墓 第1主体 及び 玉類出土状況図
 ②楯築墳丘墓 中心主体 及び 玉類出土状況図

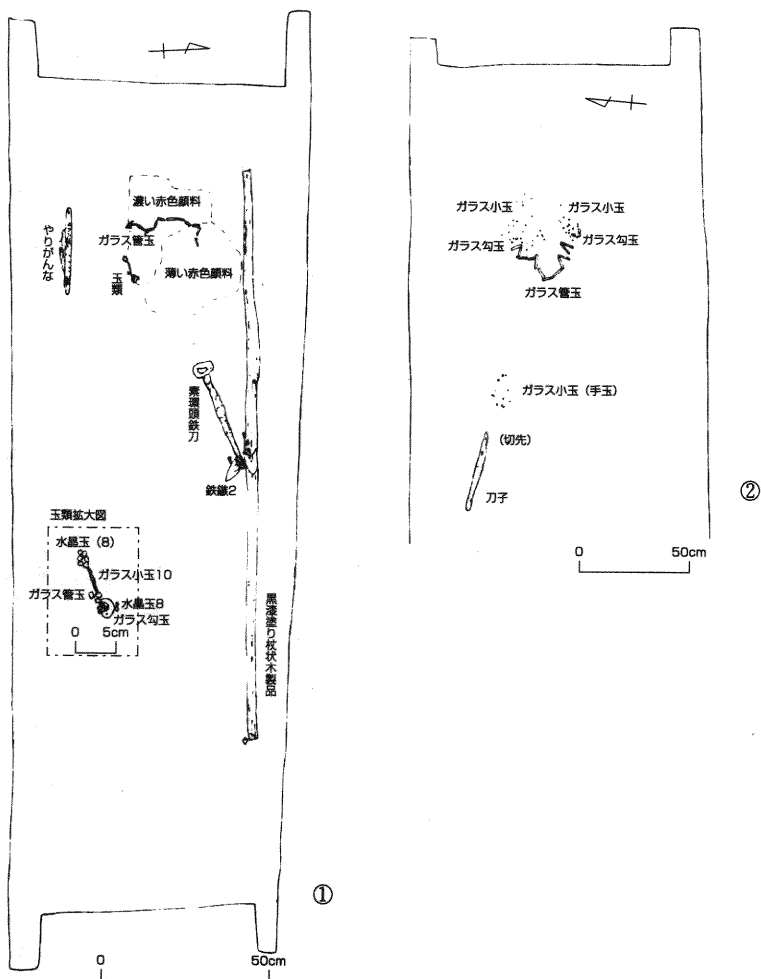
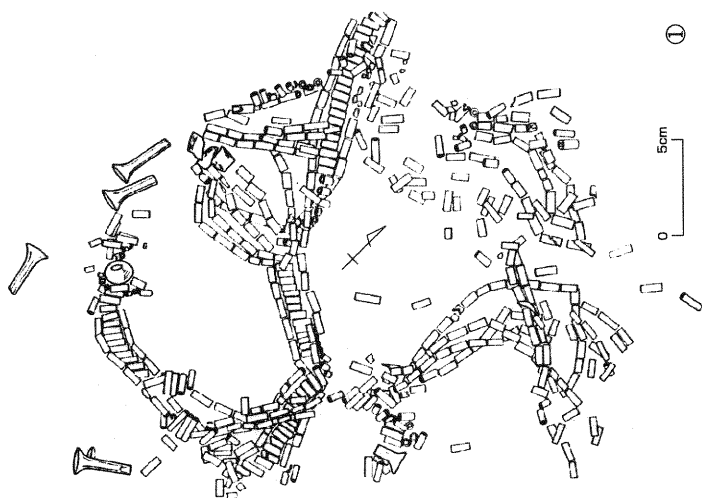
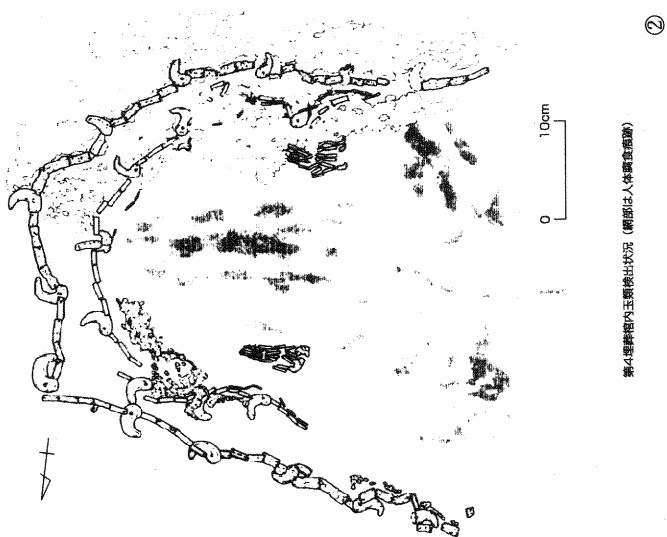


図2 ①三坂神社 3号墓 第10主体 棺内遺物出土状況
②三坂神社 3号墓 第2主体 棺内遺物出土状況



①



②

第4号葬棺の玉類出土状況（欄部は人体位置跡）

図3 ①立岩 28号薙棺 玉類出土状況
②赤坂今井墳丘墓 第4埋葬 玉類出土状況

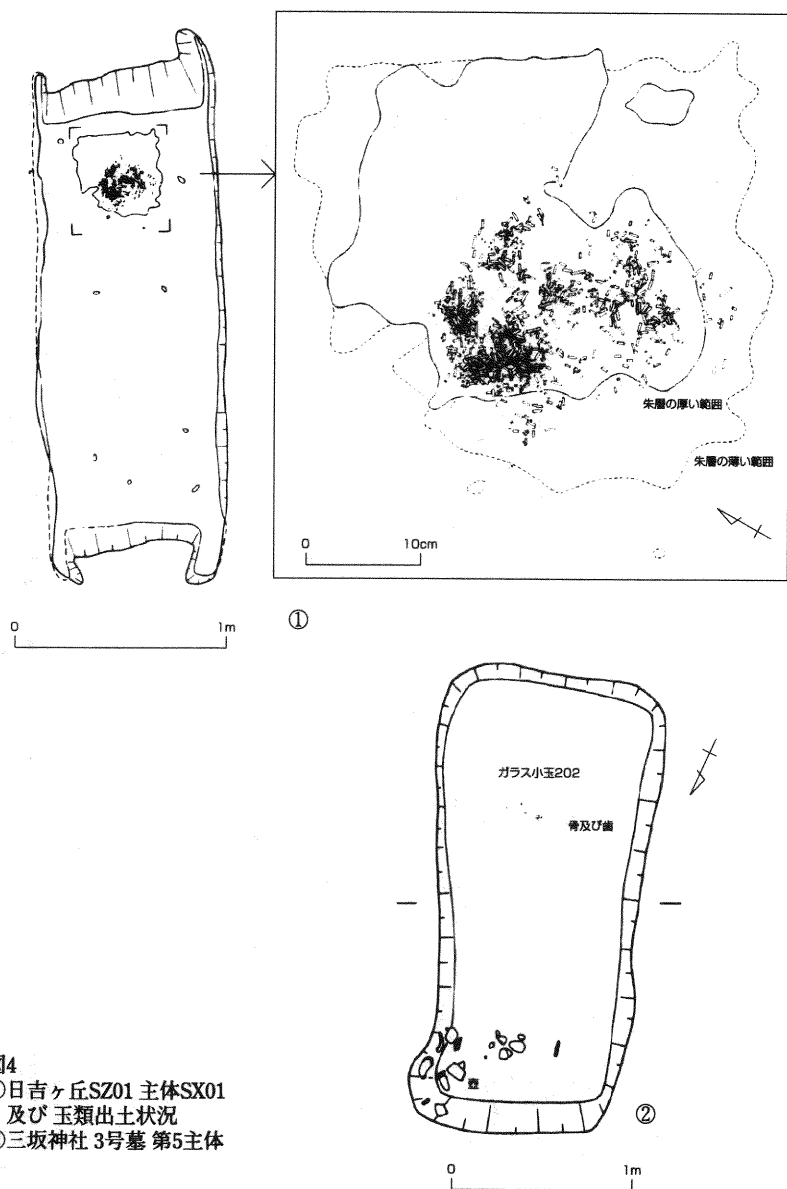


図4
①日吉ヶ丘SZ01 主体SX01
及び 玉類出土状況
②三坂神社 3号墓 第5主体

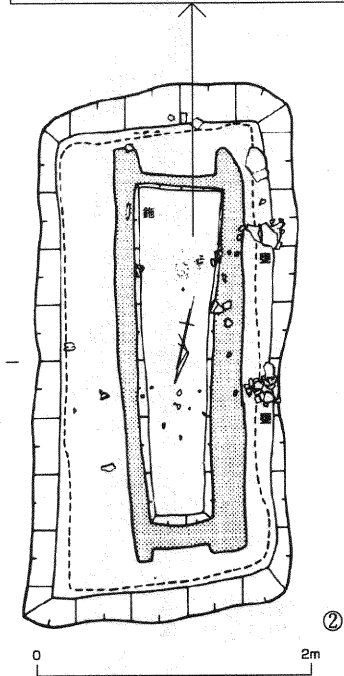
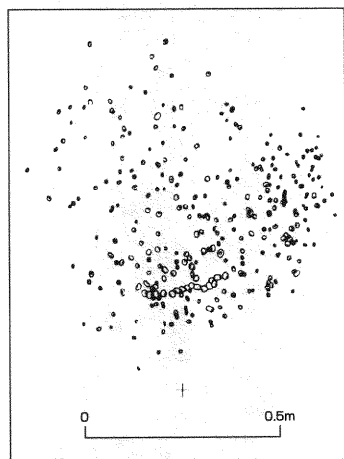
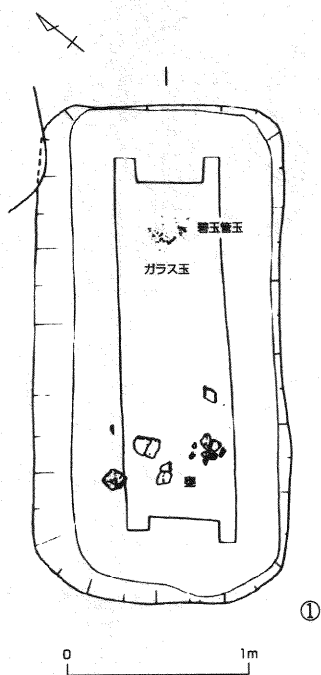


図5

- ①左坂26号墓 第8主体
②香住門谷 3号墓 第1主体
及び 玉類出土状況図

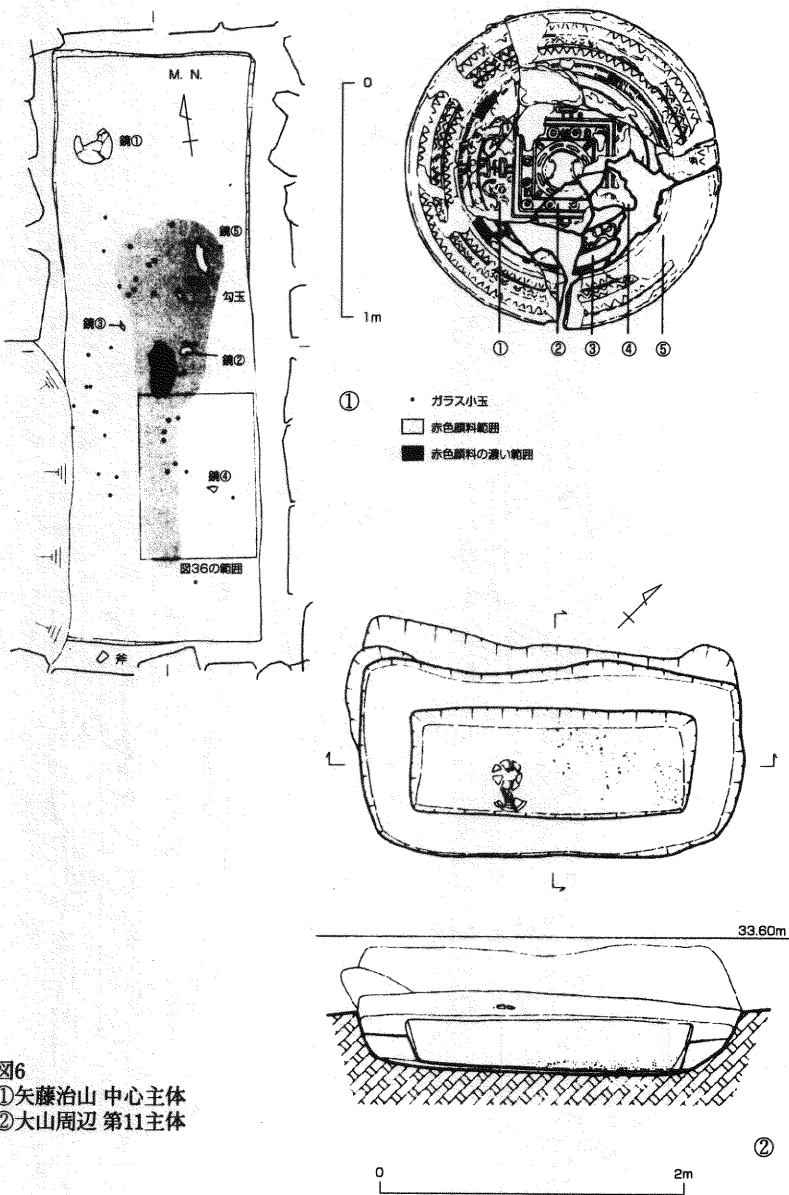


図6

①矢藤治山 中心主体

②大山周辺 第11主体

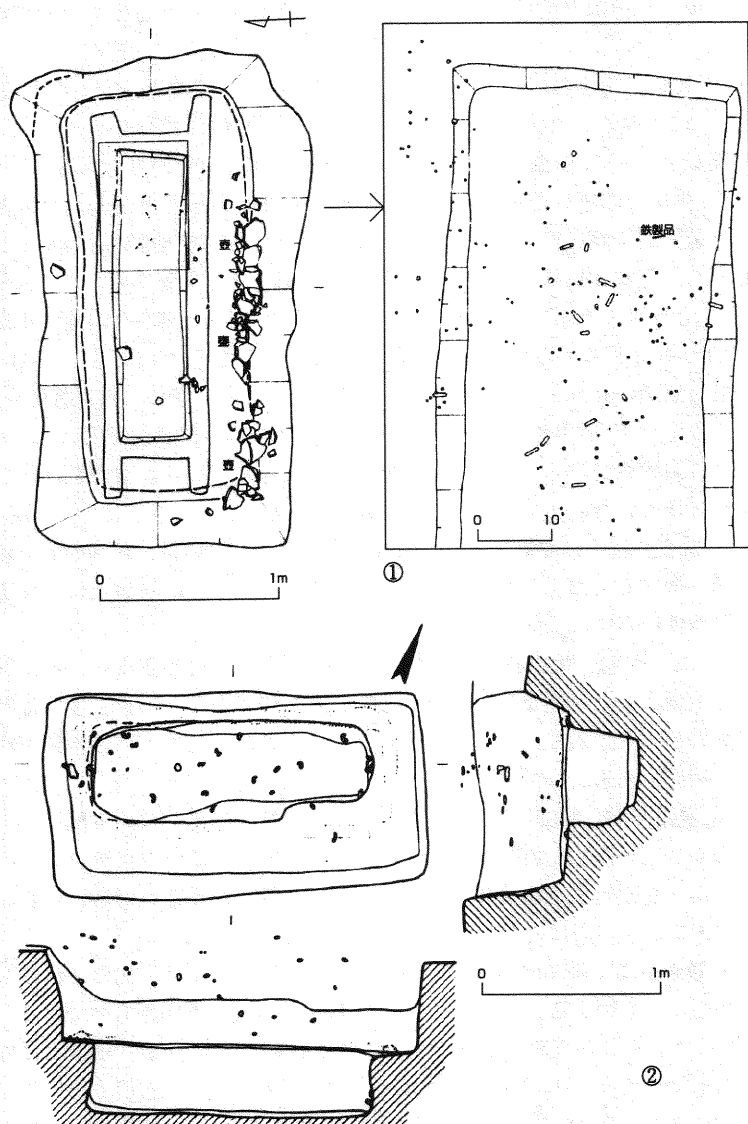


図7 ①東山4号墓 第5主体 及び 玉類出土状況図
②二塚山60号 土墳墓

配置は大きく棺内と棺外に分けられる。Aは棺内に見られる玉類の配置である。

Aaは「着装」状態の配置を持つものである。Aa1；首飾り（図1、図2-2、図5-1）、Aa2；頭飾り（図2-1、図3）、Aa3；手玉（腕輪）（図2-2）、Aa4；耳飾り（図3-2）、Aa5；頭飾りの垂飾り又は耳飾り⁵⁾（図2-1）が見られる。

Abは「集中」状態の配置である。基本的に身体があったと思われる位置で、狭い範囲に玉類を密集して出土し、かつ配列が推定できないものをこれに分類した。玉類が円状・楕円状・方形状など形を持って集中し、またAa1（首飾り）と区別できる状態で出土する例も見られ（図5）⁶⁾、その集中状態が意図的であると考えられるものは多い。意図的と考えられるものをAb1（図4・5）、意図の有無を判断できないものをAb2とした。着装（特に首飾り）であったとしても、明確にそれと判断できないものはAb2に分類しており、Ab2には着装状態が散じたものが多く含まれると考えている。また数珠状の玉を遺体上に置いたものが散じた可能性も考えられる。

Acは「散在」状態の配置である。攪乱が想定されないのに、棺内の広い範囲で玉類が散在して出土したものをこれに分類した（図6）。遺体上に玉類を撒いた可能性が高い。

Adは「添え置き」状態の配置である。棺内の遺体周辺と考えられる位置に集中して置かれた状態を保って出土しているものである（図1）。多くは数珠状にまとめられており、それが収められていた製品の名残である木質が検出される例⁷⁾もある。

Aeは推定頸部から胸部にかけて1点～少量の玉類が出土している配置である。勾玉が1点推定胸部位置に置かれている例が多い。玉類の点数が少ない首飾りであったか、または遺体上に置いたという行為が推定される。前者なら着装であるが、後者は異なるため、あえて1分類を設定した。

Afは点数が少なく副葬時の状態がわからないもの、または上記のどれにも当てはまらないものをこれに分類した。Agは出土状況が不明なものである。

Bは棺外に見られる玉類の配置である。これは副葬というよりは供献に分類されるものだろう。Baは棺外かつ墓域内にまとめて置いた状態で出土しているものである。Ba1はその位置が棺上である場合⁸⁾、Ba2は墓域内である場合である。

Bbは「散在」状態の配置である。レベル差を持って散乱して出土している

もので、棺の蓋を開めた後、棺上に玉類を撒いたと考えられる（図7）。

Bcは「埋め込み」状態の配置である。甕棺などの目張り粘土や墓壁の側壁に埋め込んだ状態、または棺材の下と思われる位置で出土しているものがある。

Bdは墓壁内の埋土中から出土しており、棺を埋める途中や墓壁上に玉類を置いたと考えられるものである。

Beは点数が少なく副葬時の状態がわからないもの、または上記のどれにも当てはまらないものをこれに分類した。Bfは出土状況が不明なものである。

次にこれら副葬に見られる玉類の配置が、弥生時代を通じてどのように変化したかを簡単に概観したい。

表2は弥生時代に見られる玉類の配置の変遷である。Aa（着衣）は弥生時代を通じて観察される配置である。なかでも首飾りの副葬は縄文時代に遡り、弥生時代を通じて見られるが、弥生時代の中期以降、特に後葉になると頭飾りや頭飾りに伴う垂れ飾りが出現し、後期になると耳飾り・手玉がそれに加わり様々な着衣方法が見られるようになる⁹⁾。

弥生時代中期中葉までは着衣以外の玉類の配置はほとんど観察されない。

表2 各タイプの出現期間

				前期	中期			後期			終末期
					前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	
A (棺内)	Aa 着衣	Aa1	首飾り								
		Aa2	頭飾り								
		Aa3	手玉								
		Aa4	耳飾り								
		Aa5	垂飾りまたは耳飾り								
	Ab 集中	Ab1	意図的								
		Ab2	不明								
	Ac		散在								
	Ad		添え置き								
	Ae		胸部配置								
B (棺外)	Ba 集中	Ba1	棺上								
		Ba2	墓壁内								
	Bb		墓壁内散在								
	Bc		墓壁内埋め込み								
	Bd		墓壁埋土中								

* 現在確認されていないが、存在する可能性がある場合点線で表示

しかし中期中葉から後期にかけて、様々な配置が出現する。まず北部九州で中期中葉から後葉にBb（墓壙内散在）が、中期後葉にはBc（墓壙内埋め込み）が見られる。また丹後や但馬など主に日本海側の地域を中心に中期後葉にはAb1（棺内集中）が、後期にはいるとAc（棺内散在）が出現する。これら中期中葉以降に出現した新たな玉類の配置は、呪的な儀礼の可能性を持つものである。さらに後期中葉～後葉になると、Ad（沿え置き）・Ba（墓壙内集中）が加わり、玉類の配置は一層多様性に富んだものとなる。

後期後葉から終末期は、西日本各地で墳墓に見られる副葬品が豊かになる傾向があり、その中で玉類の副葬も質・量共に増加していく時期である。その玉類の配置は着装が中心ではあるが、上記のように多様な配置も見られるものとなる。弥生人の葬送における意識の変化が、副葬品の内容だけでなく、玉類の配置にもあらわれているといえよう¹⁰⁾。

以上、弥生中期後葉前後～後期初頭にかけて、玉類の配置は転換期を迎え、着装的な配置に加え呪的な配置が現れるようになる。またその広がりという点を鑑みると、弥生後期後葉もまたひとつの転換期と考えられる。

この弥生中期以降に出現したAb1・Ac・Bbは、特に葬送儀礼として行われたと考えられる呪的な玉類の配置であり、弥生人の死生観と密接な関係があると考えられる。次にこれら呪的な玉類の配置を取り上げ、その出現時期や変遷、地域分布、その被葬者の特徴などを検討したい。

3. 呪的な玉類の使用

弥生時代の西日本地域における副葬品の様相は、時代・地域で様々な異なるものである。非常に簡単ではあるが概略をまとめる。

北部九州は中期後葉に玉類を含む多量の副葬品を持つ厚葬墓が出現する。しかし後期になると厚葬墓は見られなくなる中で、玉類の副葬を持つ墓は相当数に上る。また西日本全体に副葬に持つ墓は存在するが、北部九州以外では後期になるまで副葬品を持つ墓自体があまり見られない。それら数少ない副葬品は基本的に玉類である。しかし中期後葉～後期になると、丹後・但馬・山陰・北陸といった日本海側の地域で副葬品を持つ墓が増加し、多くの玉類が埋葬されるようになる。特に丹後・但馬の玉類の副葬量は傑出したものである。一方山陽側や四国地域、畿内は、中期に続いて後期も後葉になる

まで副葬品自体があまり見られず、玉類を持つ墓も少ない。しかし後期後葉から末葉にかけて鏡や多数の玉類を持つ厚葬墓が出現する状況となる。

以上のような副葬品全体の状況を踏まえて、呪的な玉類の使用について検討していきたい。

3.1. Ab1、Ac・Bbの出現と変遷

3.1.1. Ab1 (意図的な集中)

Ab1は意図的な「集中」状態の配置である。頭部（一部頸部から胸部）があったと思われる位置で狭い範囲に集中して出土しており、その集中状態は円状・楕円状・方形状などになっている（図4・5）。これについては以下のような状況が推定される。

- ①玉を密集して縫い付けた布を被葬者の頭部（～胸部）の上に置いた
- ②玉を密集して縫いつけた布を被葬者の頭部（～胸部）の下に置いた
- ③被葬者を置く前に小玉を頭部（～胸部）が置かれる位置に集中的に置いた

表3はAb1の配置を持つ墳墓一覧である。初現は中期後葉で、摂津（兵庫県）田能遺跡と丹後（京都府）日吉ヶ丘遺跡で見られるが、後期に入るとほぼ北近畿に限られる。特に丹後では出土例が多く、後期初頭～中葉では三坂神社墳墓群・今市墳墓群・大山墳墓群・左坂墳墓群と、丹後の主要な墳墓群に出現している。左坂墳墓群では後葉までこの副葬配置が見られるが、後葉～終末期の首長墓といわれる墳丘墓では観察されていない¹¹⁾。但馬（兵庫県）では後期前葉の梅田東木棺墓群で最初に見られ、また中葉～後葉には香住門谷墳墓群で観察される。件数は丹後に比べると少ないといえよう。

山城（京都府）芝ヶ原古墳は終末期の例である。密集した状態で出土し布に取り付けていたと推定されているが、鏡・銅釧が重なったその上から出土しており、遺体に直接触れていたかにはやや疑問が残る例である。

また北部九州ではこの配置はほとんど観察されていない。現在のところ、後期前葉の筑紫（福岡県）門田辻田13号土壙墓がAb1の可能性を持つ例である¹²⁾。

以上のように、Ab1の配置を持つ墳墓は北近畿に偏りが見られるが、注意しなければいけない点がある。すなわち玉が集中した状態で出土したと報告されていても、出土配置図や写真で出土状態が確認できない場合はAb2に分

表3 頭部(～胸部)に意図的に玉類が集中した状態で出土した墳墓一覧

地域	墳墓名	主体名	時期	玉類の 配置	副葬品					朱の有無	備考
					玉	鏡	武器	道具	その他		
摂津	田能	16号墓	中期後葉	Ab1	碧玉玉632a					朱	
丹後	日吉ヶ丘 三坂神社	SZ01	中期後葉	Ab1	碧玉玉677(碧玉・緑)					朱	
		3号墓		Ab1	ガ小玉197					赤	
				Ab1	ガ小玉201					赤	
				Ab1	ガ小玉296						
				Ab1	ガ小玉202						
		4号墓	後期初葉 ～前葉	Ab1	ガ小玉167						
		8号墓		Ab1	ガ小玉453					赤	
				Aa1?	ガ管玉4						
				Ab1	ガ小玉108					赤	
	今市	S-12		Ab1	ガ小玉105			鏡1			
		S-14		Ab1	ガ小玉48			鏡1			
	大山	周辺	第9主体	Ab1	ガ小玉40			鏡1			
				Aa1?	碧玉玉4						
	左坂	16号墓	後期前葉	Ab1	ガ小玉43					朱	
				Ab1	ガ小玉148					朱	
				Ab1	ガ小玉242					朱	
		17号墓		Ab1	ガ小玉177・ガ管玉1			鏡1		朱	
				Ab1	ガ小玉124			鏡1			
		1号下層墓	後期前葉 ～中葉	Ab1	ガ小玉165					朱	
		14-1号墓		Ab1	ガ小玉55						
				Ab1	ガ小玉200端						Aa1はU字状に 出土
				Aa1	ガ小玉40点程度						
				Ab1	ガ小玉70点程度						
		15号墓	後期中葉 ～後葉	Ab1	ガ小玉82						
		24-1号墓		Ab1	ガ小玉79						
				Ab1	ガ小玉122						Aa1はU字状。 大粒なもの
				Aa1	ガ小玉68						
		25号墓		Ab1	ガ小玉102						
				Aa1?	碧玉玉4						
		26号墓		Ab1	ガ小玉197					朱	
				Ab1	ガ小玉438						Aa1は弧状に 出土
				Aa1	碧玉玉24(ガ1・碧玉24)						
				Ab1	ガ小玉300						
但馬	梅田東	木棺墓群	6号墓	後期前葉	Ab1	ガ小玉30					
				Ab1	ガ小玉116						
	香住門谷	3号墓	第1主体	Ab1	ガ小玉322						Aa1は弧状。 大粒なもの
				Aa1	ガ小玉約30						
				Ab1	ガ小玉66						
		6号墓	後期中葉 ～後葉	Ab1	ガ小玉255		鉄鏃2				
				Ab1	ガ小玉322		鉄鏃1	鏡1		朱	
		13号墓	第1主体	Ab1	鉄管玉1・ガ小玉117			鏡1		赤	
山城	芝ヶ原		主体部	終末期	Ab1	ガ小玉1276					
					Ad	碧玉玉187・碧玉玉8	鏡1		鏡1	不明鉄器 7・銅鏃2	朱
筑紫	門田辻田	B群	13土墳墓	後期前葉	Ab1	ガ小玉808					

(略字 ガ:ガラス 碧:碧玉 緑:緑色凝灰岩 硬:硬玉 赤:赤色顔料)

類せざるをえない、という困難が存在する点である。特に90年代以前の発掘報告書では、玉類の配置の詳細な報告がされていない場合が大半を占める。このため可能性がある墓を多く排除している。例えば後期～終末期では、丹後坂野丘弥生墳丘墓や備中（岡山県）鋳物師谷1号墓における主要主体の玉類の配置が、Ab1である可能性があると思われる。

以上Ab1の配置は中期後葉～後期中葉まで北近畿を中心に見られ、特に丹後では主要な墳墓に類出するが、後葉になると件数が減少する。山陽側では玉類を多数持つ厚葬墓が出現する段階（後期後葉以降）になると、この配置も見られるようになる。しかし北部九州では玉類の副葬が多いにもかかわらずほとんど例がない。

3.1.2. Ac・Bb（棺内散在・墓壙内散在）

Acは玉類が棺内の広い範囲で散在した状態で出土したもので（図6）、Bbは棺内または墓壙内から玉類がレベル差を持って散在した状態で出土したものである（図7）。Acの方が圧倒的に例が多く、Bbは全体のごく一部である。Acは棺の蓋を閉める前に、遺体上で玉を撒いた、または数珠状の玉の糸を切って撒いた儀礼が想定され、一方Bbは棺の蓋を閉めた後に、同様の儀礼を行ったことが想定される¹³⁾。いずれも、いわゆる「玉の緒を切った」と表現される副葬状態であり、ここでは一緒に扱いたい。

特にAcに関しては、その出土状態を散在と判断するにあたっては幾つか問題がある。攪乱による散在は勿論であるが、首飾りなどの着装の玉が糸の腐蝕によって散らばることも考えられる。特に玉類の点数が10点前後などの少量である場合、意図的なものかの判断は難しい。攪乱がないことを確認でき、かつ棺内の半分以上などの広範囲に散布されているといった出土状況¹⁴⁾でないものは、玉類の意図的な散布であると判断できないと考え、今回は取り上げていない¹⁵⁾。

表4はAc・Bbの配置を持つ墳墓一覧である。初現は中期の北部九州で、豊前（大分県）桶尻道遺跡で後期中葉～後葉の墓から、次は肥前（佐賀県）二塚山遺跡の中期末～後期前葉の土壙墓から出土している。いずれもBbの配置でかつ墓壙上の高い位置から出土しており、棺上というより墓壙を埋める段階で撒いていると考えられる。また使用する玉が土製勾玉である点は他に例を見ない。

表4 散在状態の玉類が出土した墳墓一覧

地域	墳墓名	主体名	時期	玉類の配置	副葬品					朱の有無	備考
					玉	鏡	武器	道具	その他		
豊前	桶尻道		10号土墳墓 中期中葉～後葉	Bb	土製勾玉12						
肥前	二塚山		60号土墳墓 中期末葉～後期前葉	Bb	土製勾玉22				土製模造品		
出雲	友田	A区	Sk08 中期後葉～後期初頭	Ac	緑管玉200～ 翡翠勾玉11		石鏃7				
丹後	大山	5号	第2主体	Ac/Bb	ガ勾玉2・ガ小玉17						玉のレベル棺底5～15cm
		周辺	第7主体	Ac	ガ小玉35						
			第11主体	Ac	ガ小玉176						
				Aa1	碧管玉18						環状で
	左坂	25号	第6主体	Ac	ガ小玉288					朱	
			第10主体	Ac	ガ小玉504						
	古天王	2号	第1主体	Ac	緑管玉46・ガ勾玉1		鉄剣1			赤	
	大風呂南	1号	第1主体	Ac	緑管玉		鉄剣11・鉄鏃4	鉄製遺物・有鉤鋼線13・貝輪片		赤	
				Aa	ガ勾玉10・緑管玉						
		第3主体	後期後葉	Ac	緑管玉31		鉄剣1	鏃1		赤	
		第4主体		Ac	緑管53						
丹波	狭間	12号墓	第1主体	後期後葉	Ac	ガ小玉340				赤	
但馬	東山	4号	第5主体	後期前葉	Bb	ガ管玉18・ガ丸玉6 ガ小玉146			不明鉄製品1		
			第10主体		Bb	ガ小玉138					
	梅田東	木棺墓群	5号墓		Ac	ガ小玉93					
			11号墓		Ac	ガ小玉5					
			18号墓		Ac	ガ小玉361					
				Aa1	ガ管玉26・碧管玉55		刀子1	不明鉄製品	朱	弧状に	
	梅田東	木棺墓群	2号墓	中葉	Ac	ガ小玉123					
			15号墓		Ac	ガ小玉83				朱	
					Aa	ガ管玉11					弧状に
		大篠岡半坂	3号地点		Ac	ガ管玉5		鉄鏃1			
	立石	103号地点	第19主体	後葉	Ac	碧管玉36・硬勾玉1					
	柿坪中山	2号墳丘下	13号木棺	終末期	Ac	ガ小玉28					
		2号墳丘東側	6号木棺		Ac	ガ小玉188					
越前	小羽山	30号墓	中心主体	後期後葉	Ac	管玉114 (ガ10・碧103)	鉄剣1			朱	Bdの管玉は墓室内、棺上かなり上
					Bd	ガ管玉1					
備中	矢藤治山		中心主体	後期末葉	Ac	ガラス小玉50	鏡1		鉄斧1		勾玉尾部欠損。鏡も破砕
					Ae	翡翠勾玉1					

(略字 ガ:ガラス 碧:碧玉 緑:緑色凝灰岩 硬:硬玉 赤:赤色顔料)

九州以外では、中期後葉～後期初頭と考えられる出雲（島根県）友田遺跡でAcが見られる。後期になるとこの配置は主に北近畿で見られるようになる。丹後では前葉に大山墳墓群にAcが出現し、中葉～後葉には左坂25号墓、古天王2号墓、後葉には大風呂南1号墓と後期を通じてAcが散見される。一方但馬では前葉に東山4号墓にBbが、梅田東木棺墓群にAcが出現する。その後は全てAcで、前葉～中葉には同じく梅田東木棺墓群や大篠岡半坂墳墓群、続けて

後葉には立石103号地点・柿坪中山墳墓群などで見られ、後期を通じて主要な墳墓群で観察される配置となる。

後期後葉～終末期になると、出現する地域が広がる傾向にある。丹波（京都府）狭間墳墓群、越前（福井県）小羽山30号墓、備中矢簾泊山墳丘墓などにAcが見られる。

以上Acは中期後葉から後期前葉に出雲と北近畿で出現し、北近畿を中心に後葉まで多く見られる配置となる。さらに後葉～終末期になると山陽や北陸に出現地域が広がる。一方Bbは中期後葉～後期初頭に北部九州で出現し、そのうち後期前葉に但馬で見られるが、Acに比べ非常に類例が少ない。

3.2. Ab1・Ac・Bbの配置に関する特徴

3.2.1. 玉類副葬全体から見たAb1・Ac・Bbタイプの過多

これら呪的な意図が推測される玉類の配置は、玉類の副葬全体から鑑みてその件数は多いといえるのだろうか。これに関しても地域毎の特徴があると思われる。

Ab1・Ac・Bbの配置が最も多く見られる地域は北近畿である。この地域は後期に玉類の副葬が多いことで知られており、玉類の種類はガラス製・碧玉製などの管玉、ガラス製・硬玉製などの勾玉、ガラス小玉が存在する¹⁶⁾。上述したAb1・Ac・Bbの配置を持つ墳墓群も、各々玉類の副葬を持つ主体が非常に多いという特徴がある。丹後では後期¹⁷⁾の玉類の副葬全体では着装が最もよく見られる配置であるが、後期前葉から中葉にかけて、次に多い配置がAb1であり、中葉までのほぼ全ての墳墓群で見られる。これに比較するとAcの配置を持つ墓は少なく、一部の墳墓群では見られない。一方但馬では異なる様相を示す。まず着装の配置を持つ墓はあまり見られないが、Ac・Bbの配置を持つ墓は非常に多く、ほぼ全ての墳墓群に存在する。一方Ab1の配置を持つ墓は少ない。丹後の状況と逆といえるだろう。いずれにせよ北近畿は、玉類の呪的使用が発達した地域といえる。

出雲を含む山陰地域は前期から玉類の副葬は多く見られるが、大半が着装（首飾り）と考えられる配置で観察されており、友田遺跡のAc以外は呪的な配置は例がない。

山陽では玉類を持つ厚葬墓が出現する段階（後期後葉以降）に、これら呪的な玉類の配置を持つ墓が少数存在する。基本的に玉類を多量に持つ墓自体

が少数であるため、件数は少ないが着装状態の配置と共に主要な配置のタイプとなっている。

北部九州では中期から玉類が副葬された墓は多いが、多くは着装などの配置を持つ¹⁸⁾。他地域に先駆けてBbの配置が出現したものの、後期になると玉類の呪的使用がほとんど見られなくなり、全体の件数中で鑑みると玉類の呪的使用は、非常に珍しいものであるといえる。

3.2.2. 使用される玉類の種類

これら呪的な目的のために何の玉を選択するかという問題は、玉類の呪的使用における重要な要素であったと考えられる。各々選択される玉類は興味深い。

まずAb1に使用される玉類の種類は、中期と後期では大きく異なっている。中期の2例（田能・日吉ヶ丘）では碧玉製管玉であるのに対し、後期は全てガラス小玉が選択されている。左坂26号墓第8主体のように管玉が共伴している例もあるが、大半が着装状態と思える配置で出土しており、ガラス小玉のAb1とは異なる配置である。またガラス小玉のサイズは比較的小さいものが多いようであり、大粒のガラス小玉は首飾りとして着装状態で出土している例もある（左坂14-1号墓第4主体・香住門谷3号墓第1主体（図5-2）他）。

次にAc・Bbであるが、これも選択される玉類の種類が中期までの九州と後期の西日本では大きく異なっている。

中期の九州では土製の勾玉を使用しており、他に類例がない。一方後期ではガラス小玉が多数使用される。ガラス小玉を撒いている墓で管玉や勾玉が共伴している場合も多いが、その場合管玉と勾玉は異なる配置、すなわち着装状態で出土している例が大半を占める¹⁹⁾。また管玉も多くはないが撒く玉として選択されている。全体的に丹後・但馬ではガラス小玉が多いが、それ以外の地域で管玉が多く、また後葉以降になると北近畿も含めて管玉の選択が増加するようである。使用される管玉は碧玉製・緑色凝灰岩製・ガラス製と素材は多様であるが、東山4号墓以外は管玉が使用される場合は管玉のみを、ガラス小玉が使用される場合はガラス小玉のみを散布している点は注目される。

ここから鑑みても、中期九州に見られるBbの儀礼が、後期に見られるAcの儀礼に直接発展したと考えることについては、やや問題が生じるかもしれ

ない。

3.2.3. 呪的な玉類の配置を持つ被葬者

次に各々の配置を持つ墓の被葬者像について考察したい。

後期中葉までAb1・Ac・Bbの副葬タイプが見られる主体は、墓壙の位置・サイズ・その他の副葬品に関して抜き出た点は見られず、墓群の中心的な主体²⁰⁾とはいえない²¹⁾。

後期後葉になると中葉までの様相とやや異なる。この時期は西日本各地で墳丘墓が出現し、首長権が伸張すると考えられている時期である。丹後では玉類の副葬自体が群集墓で見られなくなり、限られた墳丘墓の被葬者のものになっていく傾向が存在する。その中でAb1の配置は見られず、一方Acは首長墓と目される大風呂南において中心主体を含めて出土している。

しかし但馬は後期後葉になっても大規模な首長墓は出現しない地域であり、玉類の配置も後葉になっても変わらずAb1・Acともに散見される。

一方北近畿以外の地域をでは、Ab1が見られる芝ヶ原、Acが見られる小羽山30号墓・矢簾治山はいずれも墳丘墓であり、首長墓と考えられている墓である。その玉類が副葬された被葬者はいずれも大規模な墓壙を持つ中心主体であり、首長に対する儀礼としてなされている点は重要である。

老若男女の別であるが、後期中葉までと後葉の但馬においてはAb1・Ac・Bbの配置を持つ主体の棺のサイズは小児から成人サイズまであり、年齢的な偏りは見られない。後葉の首長墓に関しては上述のとおりである。また性別は後葉も含めて骨が残存していないため不明である。

次にこれらの呪的な玉類の使用の背後にある、弥生人の死者に対する意識を考察したい。

4. 中国の葬玉と、弥生の玉類の呪的使用

これまで弥生時代の副葬について、その思想は中国の影響を大きく受けていると論じられてきた。高倉（1999）は北部九州の副葬は中国埋葬習俗に系譜を持つと考察している。すなわち、弥生前期末からの北部九州における副葬習俗の成立は、朝鮮青銅器文化の伝播に伴う新たな文化に起因するとし、この時期の朝鮮半島の副葬習俗自体も中国の埋葬習俗に系譜を持つとしてい

る。そして中期後半段階のいわゆる「王墓」に見られる副葬習俗は、漢（楽浪郡）との接触による中国的なイデオロギーの摂取であると論じている。

また小山田（1995）は弥生時代後期の副葬において、玉の呪力が遺骸に対して強く観念されており、遺骸保護のために使用したとしている。そしてその玉の呪力とは中国からの思想的影響という視点で理解し、中国の玉（ギョク）の持つ呪的観念のもとに、本来は装飾用であるはずのガラス小玉や管玉などの玉類が葬玉に転用されたのだと考察している。

これまで検討してきたように、玉類の配置は弥生中期後葉前後から後期初頭にかけて転換期を迎え、着装的だけでなくより呪的な玉類の配置が出現する。この中期後葉という時期は、前108年に前漢の武帝によって設置された楽浪郡との交渉が始まる時期である。

まず弥生中期～後期の併行期である中国漢代の墓における葬玉を検討し、弥生における玉類の呪的使用との関連を考察したい。

4.1. 漢代の葬玉²²⁾

中国漢代の葬玉²³⁾の研究について、日本においては林巳奈夫（1999）・町田章（2002）の研究に詳しい。中国では古代から死者に玉（ギョク）を添えて埋葬する習俗が存在するが、この葬玉は西漢（前漢）に制度化される。西漢では、特に死者の顔や身体を葬玉で覆う状態が観察される。

顔を覆う葬玉として覆面玉札と箱型覆面（温明）が存在する。覆面玉札は顔の五官を表現する玉札を布地に縫いつけたものであるが、西周時代から現れ西漢（前漢）時代中期ごろまで存続する。漢代になると五官のみを玉で表現するタイプと、顔面全体を玉札で覆うタイプが存在する。また箱型覆面は長方立体の2面をあけた木製の箱を人の頭部から胸部にかけてかぶせる覆面で、箱の内外に玉札・ガラス札・銅鏡を詰めこむのが特徴である。西漢中期以降に出現したもので、西漢の後期から東漢（後漢）の前期に見られる。

身体を玉で覆う葬具が玉衣である。全身を玉札で覆う全身玉衣と、頭部や手足を玉札で覆う部分玉衣が存在し、部分玉衣は全身玉衣の簡略形態であると考えられている。全身玉衣は漢代を通じて存続し、部分玉衣は西漢にのみ見られるようである。西漢後期には玉札だけでなく、ガラス札も玉衣に用いられていることは重要である。

また棺内で遺体の頭をのせる玉装枕も葬玉の範疇に捕らえられるもので、

玉の威力によって頭脳を守る意図を持つとしている（町田 2002）。またこの枕にも玉だけでなくガラスが使用される例が見られる。

このように葬具に玉を使用し身体を覆う理由は、玉は遺体を保全し昇仙する効用がある、と当時の人々が考えていたためと思われる（町田 2002； p 121）。特に死者の頭部を防備する各種の試みが見られる点は重要である。古代においても頭部が人体の中枢であり、頭脳をはじめとする体内に存在する諸器官が人の思考・精神を左右するものとして理解された。特に五官が集中する顔面の保存については並々なめ努力のあとが見られる（町田 2002； p 127）。玉枕の使用も同じ意図を背景に持つもので、頭部から気・魂魄が流出するのを防ぐためと考えられている（町田 2002； p 216）。

以上、西漢時代の葬玉は特に中期から後期にかけて盛んとなり、またその使用において頭部がことに重視されていたことが伺えよう。これら葬玉の配置やまたその思想が、当時楽浪と交渉を持った倭人に影響をもたらしたことは想像に難くない。また漢帝国の権威を取り入れようと積極的に導入した首長もいたであろう。一方で漢帝国自体が藩国の王に対して、下賜品として葬具を与えたことも考えられる²⁴⁾。

4.2. 頭部の保護思想——Ab1（集中）の背後にある意図

この西漢の葬玉の思想が最も反映された、弥生における玉類の呪的使用がAb1ではないかと推測される。

Ab1は被葬者を埋葬する際におそらく布に縫い付けられたガラス小玉を、頭部の下または顔面上に置いたもので、これは頭部を保護するためと考えられる。また当時の人々が頭部を重視していたことは朱の例からも伺える。Ab1の配置を持つ墓において、玉類の位置と同じ広がり、すなわち頭部と思われる位置で朱（または赤色顔料）が散布されている例は多く観察されるのである²⁵⁾（表3）。Ab1の配置と朱、いずれも当時頭部が重要視されていたことを示している。これは西漢に見られる「頭部の保護」という思想と一致すると考えられる。

またこのAb1、すなわち頭部保護の意図を持つ配置に使用した玉類が、導入期の中期後葉の管玉から、後期にはガラス小玉に変化しているという点を前章で指摘した。漢代において、ガラス札を玉（ギョク）札とともに使用した、または玉（ギョク）の代替品として使用した例があり、ガラスは玉（ギ

ヨク)に準じ同様の特性や効果を持つと考えられていた。弥生後期において、頭部保護の意図を持って玉類を使用する際に、当初使用していた碧玉管玉を選択せずにガラス玉を使用したということは、儀礼の皮相的な模倣ではなく呪的な「玉(ギョク)」の効用の理解をもって、この習俗を取り入れたと考えてよいのではないだろうか²⁶⁾。そして、この窓口となったのは、北近畿と考えられる。

北近畿で後期に圧倒的な量のガラス玉類が存在している背景には、ただ単に先進国の珍宝という観点でガラス玉類を扱っていたのではなく、呪的な玉(ギョク)の効用を理解しそれを使用するという意図が存在したために、積極的にガラス玉類を入手したという可能性はないだろうか²⁷⁾。

ところで、遺骸保護思想は後期以前の弥生時代から見られるものである。小山田(1995)は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての破碎鏡や玉類の出土状況を検討し、木棺等の被覆粘土や甕棺の合わせ口の日張り粘土が遺骸保護の思想に基づくものであり、それは中国における「再生と復活」という観念を受容したためであることを論じ、副葬はその実現を願って行われたとした。そしてこのような北部九州における遺骸保護の思想に基づく儀礼行為は弥生終末期に西日本へと拡散したと考えている。

一方禰宜田(2005)は弥生時代北部九州の甕棺墓における葬送儀礼を論じ、甕棺の日張り粘土が遺骸保護と辟邪の用にあり、また甕棺に施される鈎記号と副葬品も辟邪の用を期待する観念が働いていたと考えた。そして遺骸保護の思想に基づく葬送儀礼が弥生前期中頃あるいは前期末に出現し、そしてこの時期を考えると、少なくとも中国思想がもたらされたことにより一気に成立したと考えるのには躊躇を覚える、としている。

中期後葉以降に西日本を中心に見られる遺骸保護の思想と、その元になった中国の遺骸保護の思想、そして北部九州で見られる遺骸保護の思想には、重要な差異が存在すると思われる。すなわち西日本や西漢²⁸⁾で見られる「頭部」を重視する「頭部の保護」という観点が、北部九州では見られない点である。それ故、前期中頃から末頃に成立した北部九州の遺骸保護の概念と、中国の遺骸保護の思想と直接的に結びつくということについては、禰宜田氏と同様に疑念を提するものである。また北部九州の遺骸保護の概念が、弥生後期に単純に西日本に広がったと点についても疑念を感じる。

後期の北近畿を中心に西漢後期の葬送儀礼・死者への観念が受容され――

既に遺骸保護の概念が存在していたために受け入れやすかったと考えられる——、やがて弥生終末期においては再び北部九州の遺骸保護の観念と結びつき、西日本に広く拡散したのではないだろうか²⁹⁾。

この玉類の呪的使用がなされた被葬者は、後期中葉まで墓群の中心的な主体でない点が中国とは異なる点である³⁰⁾。この死者への玉類の呪的使用が選択されたポイントは、被葬者の職能によるといった可能性なども考えられるが、しかしその検討は難しく、今回は問題を提示するにとどまりたい。

この頭部を中心とした玉類の集中的な配置は、古墳時代にも継続して存在すると考えられる。上野（群馬県）稲荷山古墳では西槨の主体において、石枕の下にガラス小玉千余个と滑石白玉百余個がまとまっていた例が見られる（相山 1972）。また尾張（愛知県）白山藪古墳では首飾りと考えられる管玉と共に、頭部付近に集中した玉類の配置が見られ、Ab1の可能性が高い（福永 1995）。このように古墳時代ではガラス小玉を初めとする玉類の他に、鏡と腕輪型石製品により遺骸全体や遺骸頭部を重点的に囲む、という副葬品の配置方法は多い。小山田（1995）は弥生時代の遺体保護の呪的観念をベースにして、新たな宗教的イデオロギーである神仙思想、そして鉄信仰が複合したものが、前方後円墳の副葬品の思想的背景であると考えている。

墳丘墓が築かれる時期の丹後³¹⁾で、Ab1の配置があまり見られなくなる一方で、鏡を持つ山陽の墓——すなわち北部九州的な権力の象徴を受容した墓の中心主体で、北近畿の系譜を引くと考えられるAb1の配置が見られるという点、そして頭部保護の概念と玉類の使用が古墳時代に続くという点は、この古墳時代前夜における遺骸保護概念の統合とその後の儀礼の系譜において、様々な問題を提示している。

4.3. 「玉の緒」を切る——Ac・Bb（散在）の背後にあるもの

Ac・Bbはいわゆる「玉の緒を切る」という儀礼をとる、玉類の呪的使用である。これまで検討してきた、西漢においてはこのような形態の儀礼は見られず、中国の思想をもとに成立したものではないようである。

繰り返しになるが、「玉の緒を切る」という表現は、着装品などが散乱したのではなく、意図的に撒かれた状態で出土した玉類の状況を示しており、またその状況に対して名付けられたものである。この意図的に撒かれたと考えられる玉類の状況は、古墳に見られる玉類の副葬品の研究において、当初

観察、報告されたものである。その後、弥生時代の墳墓においても同様の意図的な散乱と考えられる状態の玉類が観察され、その表現が使用されることとなった。

初期の研究である後藤守一の論文（1940）では、古墳から出土した玉の用途は装身具であることを専らとしつつも、なお祭祀に用いられたものもある、とし、上野（群馬県）稲荷山古墳西塚に見られた副葬品の玉の配置が散乱状態を示しており、葬送の際に故意に玉の緒を切り離したと推定しよう、と述べている。その後、古墳に見られる祭祀的な玉類の状況についての諸氏の研究においても、散乱した玉類に対してこの「玉の緒を切る」という表現は定着している（椋山 1972・伊藤 1989・玉城 1994・廣瀬 1995 他）。

しかしいずれの研究も、この「玉の緒を切ったような」という出土状態を抽出はするものの、「玉の緒を切る」という状態の厳密な定義や、また「玉の緒を切る」という表現についての解釈、またその状態の背後にある意図などについては言及していない。

この儀礼は、現在のところ最初に出現したのは弥生中期中葉から末葉の北部九州であるようだ。被葬者の棺蓋を閉めて墓壙を埋める途中で、土製勾玉を撒いたという形態をとる儀礼であった。さらに中期後葉～後期初頭の出雲で、また後期前葉には北近畿で似ているがやや差異を持つ儀礼が行われる。すなわち、棺蓋を閉める前、または棺蓋を閉めた直後に玉類を撒くという儀礼である。その後は北近畿のタイプが弥生後期後葉に各地に拡散、そして古墳時代の同様の儀礼行為につながるものと思われる。この儀礼は、古墳時代に入ると広く西日本や東日本において観察されるものとなる。美作（岡山県）月ノ輪古墳、山城長法寺南原古墳、大和（奈良県）池ノ内1号東棺、駿河（静岡県）三池平古墳、会津（福島県）大塚山古墳などがその例である³²⁾。古墳時代のこの儀礼に使用される玉類は、前期には碧玉質の管玉が見られる他、白玉・ガラス玉も主体的である（廣瀬 1995）。

すでに前章で述べたように、中期に北部九州で見られた儀礼が、直接後期の北近畿を中心に行われた儀礼へと変化したかという問題は、今後の検証を待つ必要がある。しかしいずれも「玉の緒を切る」という観念をもとにして、この儀礼が行われたと考えられる。

それではこの「玉の緒を切る」という儀礼の背景には、当時の弥生人のどのような意図が存在したのであろうか。

古代において、玉は魂に通じ、首飾りの玉を貫き通す紐が「玉の緒」と考えられ、玉の緒は転じて生命の緒または生命そのものの意に使用されることとなった。そして玉の緒を結ぶ行為は、その人間の魂を身体につなぎとめておく呪いを意味していた（谷川 1983）。玉の緒はいのちを表しており、玉の緒が絶える、ということはいのちの終わりを示している。ゆえに玉の緒を切る行為は、その人間の魂を身体から切り離す行為に他ならない。それは死を表す象徴的行為であると共に、そこには死者への恐れという観念が垣間見られる。この儀礼の本質は、死者または死霊の再帰を防ぐ意図にあったのではないかと考えられる。

この「玉の緒を切る」という儀礼の原型を求めるのならば、玉の破壊、という行為が近いものではないかと考えられる。管玉や勾玉を一部壊して死者に副葬する行為は弥生時代にしばしば観察されており、さらに古墳時代になっても存続するものである（梶山 2005他）。それら玉類の破壊行為の中で、勾玉の尾部を壊して副葬する行為は散見されるが、これは特に「玉の緒を切る」という行為と非常に近い関係にあるのではないだろうか。Acを出土した墓においても、例えば二塚山60号土壙墓の散布された勾玉は破碎を受けており、また矢簾治山墳丘墓で被葬者の推定胸元位置から出土した勾玉は尾部が欠損し、共伴する鏡も破碎していた。これらはいずれも意図的なものと考えられている³³⁾。既に縄文時代から勾玉は魂を結びとめる呪的装身具であった（木下 2000）。魂を切り離すために玉を破壊する、玉の緒を切る、という行為は、縄文時代から続く日本の伝統的な魂観が継承され、発展したものと考えられる。

そのような玉類の破壊行為をもとにして生まれたと推定される「玉の緒を切る」という儀礼であるが、少なくとも中期後葉以前には、長い首飾り状（おそらく）の玉類を使用する、「玉の緒を切る」という儀礼行為は見られない。既に述べたが前期には少量の玉類を撒いた可能性がある墓はあるものの、着装や埋葬後の攪乱との区別は困難である。またそのような可能性を持つ墓は玉類を持つ墓のごく一部であり、後期のような地域的な広がりも見られない。いずれにせよ中期後葉以後の、明白な「玉の緒を切る」儀礼とは一線を画すものである³⁴⁾。

この儀礼が成立する時期は、漢文明と初めて直接的に接触した時期であり、その成立には中国的な観念の影響があった可能性がある。この頃中国では葬

玉が発達し、それらは視覚的に人に訴えるものであった。当時伸張し始めていた首長権にとって、新たな儀礼、そしてより視覚に訴える儀礼の確立も重要視されていたと考えられる。ここからは推測の域を出ないが、日本古来の魂と玉の密接な関連性、中国からの影響、そして首長権が伸張する時期の内部から出た必要性が合わさって、この「玉の緒を切る」という儀礼が成立したのではないだろうか。

興味深い点は、この「尾を切る」行為に使用される玉類として、ガラス小玉だけでなく管玉や勾玉も選ばれている点である。これは弥生後期に見られる頭部保護に用いられている玉類が、ガラス小玉だけであったという選択と大きく異なる点である。特に後期前葉～中葉の、「玉の緒を切る」儀礼にガラス小玉が多く選択されていた時期を経て、後期後葉の儀礼の拡散期に管玉が再び選択されることとなる。そして続く古墳時代には、その方向性を踏襲し、ガラス小玉をはじめ勾玉・管玉・滑石製白玉などが選択されている。この選択の変化には、本来日本における呪的な玉類が勾玉と管玉であった、ということが背景にあるのではないかと考えられる。「玉の緒を切る」という儀式は、縄文から続く日本古来の「魂＝玉結び」の観念がベースとなっていると考えられる。それゆえに中国の葬玉の概念——何ゆえにガラスが選ばれるか——への理解が希薄になる地域³⁵⁾に拡散するにつれ、日本の呪的な玉類である管玉や勾玉へと再帰することになったのではないだろうか。

この呪的な玉類の儀礼が行われる被葬者は、既に論じたように後期中葉までは墓群の中心的な主体ではない。その被葬者が選ばれる原理についての解明は、頭部保護の玉類を持つ被葬者像の解明と同じく困難である。想像をたくましくするのであれば、恐れられていた人物、例えば呪術に携わるような人物、または悲劇的な死を遂げた人物——この世に恨みを持つと考えられる——などに対して、その死霊の再帰を恐れて行われた、といった推測も考えられよう。

いずれにせよ後期後葉の転換期を迎え、やがて古墳を築く首長層に受け入れられたこの儀式は、変容しつつ古墳時代に引き継がれていったと考えられる。

おわりに

以上、本稿では弥生時代の墓に見られる玉類の配置から、特に弥生人の死

生観に関係すると考えられる、呪的な玉類の配置を検討してきた³⁶⁾。その成立時期が中期後葉～後期前葉にかけてであり、そしてその拡散時期が後期後葉～終末期にかけてである、ということは非常に重要な点である。いずれも首長権が伸張する時期であり、社会にとって大きな変革期であった。そのような背景の中で、死者への観念の変化や、これまでと異なる葬送儀礼への必要性が生じ、これら新たな玉類の配置が生まれたと思われる³⁷⁾。

Ab1（被葬者の頭部への玉類の集中）という玉類の配置は、「頭部保護」という目的を持つ玉類の呪的な使用であると考えられ、そこには中国の死生観とその葬玉の影響が強くあらわれていると推測される。一方Ac・Bb（棺内または墓壙内に玉を撒く）という玉類の配置は、「玉の緒を切る」という儀礼としてあらわれる玉類の呪的な使用であると考えられ、そこには日本古来の「魂＝玉」そして「死者への恐れ」という観念をもとに成立したものと推測される。

「遺骸の保護」と「玉の緒の破壊——死者の再帰への恐れ」、それは相反する思考といえる。Ab1とAc・Bbの玉類の配置が一被葬者の墓の中では共伴しない³⁸⁾、という事実も重要であろう。如何にしてこれらの呪的な玉類の儀礼が選択されたのか、それに関しては推測の域をでない。しかし弥生人の死者への愛着と恐怖、相反する二つの思いが様々な呪的な玉類の使用によって、彼らの墓に留められていることがわかるのである。

- 1) 装身具もまた呪的な使用の一部であった可能性は常に存在する。
- 2) 特に後期に玉類の副葬が多く見られる丹後地域に関しては、すでに拙稿で検討している（小寺 2005）。地域ごとに分けての報告を考えていたが、今回はとくに呪的な玉類の使用に焦点を当てて検討し、地域に焦点を当てた玉類の副葬行為全体の考察は別稿を予定している。
- 3) 副葬と供献という言葉の使用については様々な論があるが、ここでは墓に伴う玉類は全て副葬として扱っている。
- 4) 今後はさらに集成地域を広げる予定である。
- 5) 頭の左右に見られる玉は耳飾りとされることが多いが、頭飾りに付属する垂飾りの出土もある。その区別が曖昧なものはこれに分類する。
- 6) 管玉や大粒のガラス小玉が首飾り状の配置を持ち、一方小粒のガラス小玉

は集中した状態を保つという例が見られる。(左坂14-1号墓第4主体・香住門谷3号墓第1主体他)

- 7) 浅後谷南墳墓第1主体
- 8) まとまった状態で、かつ棺内の棺底よりかなり高い位置(レベル)で出土した場合、棺上に置いたものが棺蓋の腐食により棺内に流入したと考えられる。
- 9) Ae(胸部配置)も縄文時代から見られ、Aa1に準ずる状況となっている。
- 10) これら副葬品の変遷についての詳細な検討は次稿を用意したい。
- 11) 坂野丘第2主体のガラス小玉はAb1の可能性があるが、出土状況の図がなく断定できない。
- 12) 北部九州は墓の発掘例が非常に多いため、まだ資料の脱落を調査中である。
- 13) 白石(1985)は古墳における石製模造品の祭祀を論じる中で、千葉県石神2号墳の棺内において30cmのレベル差を持って散乱する玉について考察し、樹皮などにかけられそのまま棺内に納められたことを想定している。
- 14) 例えば、但馬の大篠岡半坂3号地点第1主体は、玉の点数が5点と少量であるが、鉄剣を伴って攪乱状態でないことが確認でき、また棺の2/3の範囲に玉が散乱しており、Acと判断した。
- 15) このような例は多くはないが、例えば徳島の前期後葉の庄・蔵本遺跡3号土壙墓の管玉は、意図的に散布している可能性があると報告されている(北条1998)。しかし12点と点数が少量で、糸が切れたことによる散乱といった可能性が否定できないものと考え、取り上げていない。
- 16) 但馬では大半がガラス小玉であり、その他の玉は極少量に過ぎない。
- 17) 丹後ではAb1の配置を持つ日吉ヶ岡以外、また但馬では中期の駄坂舟隠遺跡以外に、中期以前に副葬品を持つ墳墓は例を見ない。
- 18) 中期は甕棺墓が大半を占めるため、遺骸が棺の底に片寄るなどの例が多く玉類の配置も不明な場合が多い。
- 19) 大山周辺第11主体・梅田東15号墓他
- 20) 丹後では中葉までは傑出した墳丘墓や、巨大な墓壙を持つ中心主体は存在していない。しかし各台状墓において、その墓壙の配置(墓の中心的な場所に存在)や副葬品が他よりやや抜き出ている、中心的な主体または主体群が存在する。また但馬では後期を通じて、傑出した墳丘墓や主体は存在していない。
- 21) 中心的な主体ではむしろ、着装の配置が多いようである。
- 22) この段落——4.1. 漢代の葬玉——において、中国の葬玉について述べる部分で使用する「葬玉」並びに「玉」は全て、中国のいわゆる玉石である

「ギョク Jade」を指す。

- 23) 葬玉は喪儀に際してつくられ使者の身辺に配置した玉を指す。
- 24) 町田 (2003; p214) は「日本の三雲遺跡などから出土しているガラス璧は、箱型覆面や枕などに装着した状態で倭人に伝えられたのであろう」と推測している。また高倉 (1999) は三雲南小路1号甕棺墓副葬品の鏡・ガラス璧・金具について、藩国の王に対し下賜された葬具とし、ガラス璧は玉璧の代用品、大型前漢鏡は東園温明 (箱形覆面) と考えている。
- 25) この時期の墓では墓壙内に朱が敷かれている例が多々見られるが、朱は遺体を保護すると考えられており、特に頭部付近に集中して散布される例が多い。
- 26) 中期後葉に摂津の田能で見られるAb1は碧玉製管玉を使用し、またその集中位置は胸部であった。これはまだ理解が乏しい状態にあると思われる。
- 27) 弥生時代では列島内においてガラスを原材料から作り出す技術はなかった。弥生時代に見られるガラス製品は完成品を列島外から入手した搬入品か、または搬入品を熱するなどして再加工した再加工品である (藤田 1994・小寺 2006)。
- 28) この頭部重視の概念は、覆面玉札の出現する西周時代から既に存在すると思われる。
- 29) ところでこのような頭部保護の概念が、楽浪などから中国文明圏から直接的に影響を受けたのか、または中国の副葬習俗の影響下にあった朝鮮半島を経由して間接的に受容されたのかは、異論があるところである。この時期、北近畿地域は後期には鉄素材の獲得を目的として、直接的かつ活発な対外交渉を行ったと考えられており、またその墓制に関して南部朝鮮の墓制との関連も指摘されている (広瀬 2000)。一方丹後の鉄器の様相から、丹後地域では弥生後期において、漢あるいは新との貢賜関係あるいはそれ以上の政治関係を想定することも可能であるとの指摘も見られる (野島 2000、野島・野々口 2000)。
- 南部朝鮮における弥生中期末～後期の併行期では、玉類の副葬形態についての研究は現在なされていないが、報告書では首飾り状の出土という記述が多く見られる。しかし一方で単純に首飾りといえる状態ではない出土状況も存在する。例えば昌原三東洞遺跡の1号石棺墓や2・10号土壙墓の玉類の出土状況は、推定頭部付近に玉が集中しており、Ab1の可能性があると考えられる出土状況である。この習俗の経由地の問題は、今後の研究課題である。
- 30) 中国では皇帝から諸侯に賜与される葬玉は制度化されていた。
- 31) それまで丹後のこのような呪的な墓制の中心であった竹野川流域の勢力一

—三坂神社墳墓群・左坂墳墓群などを築いた勢力——は斜陽し、墳丘墓を築く新たな勢力が台頭してきた。ここで旧勢力によって盛んに行われていた玉類の呪的使用を好まなかったという可能性も考えられる。

32) 相山 (1972) ・伊藤 (1989) ・廣瀬 (1995) 他の論文より。

33) また玉類のみならず葬送に関連する葬具の「破壊」という行為は、弥生人の葬送に度々見られるものである。玉類の破碎や鏡の破碎 (破鏡の副葬ではなく、完形品をあえて破碎して1主体の棺内に分散して副葬しているもの)、そして墓壙内や墓壙上における土器破碎供献などは、死者の再帰を防ぐ意図が存在する可能性があるだろう。

34) 中村 (2006) は前期の庄・蔵本遺跡3号土壙墓の玉が散乱している可能性を取り上げ、韓半島からの影響の可能性を論じている。韓半島の松菊里文化では、南海中部地方 (泗川・麗川) を中心に、墓の棺石の間や床面広範囲から管玉が出土する例があり、またその管玉自体が破損している例もあるとのことである (崔2004)。時期的には無文土器時代前期であり、Ac・Bbが見られる弥生中期中葉以降とは時期的にかなり隔たりがあるが、弥生前期の墓に玉類の少量の意図的な散乱があるのなら、南海中部地方との関連性は検討する必要性があろう。

なお崔 (2004) はこの管玉の破損 (破飾) や、石剣を折る (折剣) 行為を、死者の葬儀に関連して近親者が行った哀悼ないし哀悼傷身の物質的な表現と考え、哀悼毀器という用語を造語している。しかし哀悼傷身は自らの身体に対して行うことに意味があり、玉や剣の破壊が哀悼に通じるという考えはやや無理があろう。

また玉類の破損についてであるが、首や腕に玉を結う (または首飾り・腕飾り) をするのは、魂が体の外に出ないように、また悪い霊が侵入しないように、というまじないをこめたもので、東アジアに広く分布している風習であり (谷川 1983)、古代でも同様の観念が広がっていたと考えられる。この観念を逆説的に扱う玉の破損は、古代より東アジアに広く見られる風習である可能性がある。

35) 頭部保護思想を論じる時に述べたように、北近畿ではガラスが玉 (ギョク) に準ずる、という中国の観念が導入され理解されていたと思われる。

36) このタイプ以外に、呪的な玉類の配置の可能性のあるものは何タイプが存在する。Ba1 (墓壙内に玉類を配する)、Bc (墓壙内などに玉類を埋め込む) に関しては今回枚数的、時間的にも余裕がなく検討を行わなかった。棺 (特に甕棺) に塗りこめられた玉類を初めとする副葬品については、欄宜田 (2005) が遺骸保護の観点から論じている。

- 37) 東日本を検討する前に結論を出すのは時期尚早ではあるかもしれない。しかし、東日本地域では弥生時代初期～中期にかけて甕棺再葬墓が発展している点、また東日本の弥生時代の玉文化は西からの強い影響を受けている（設楽1993）点などを鑑みると、弥生中期～後期の呪的な玉類の使用については、西日本を中心として発達したと考えて問題はないと思われる。
- 38) 一人の被葬者の墓からAa1すなわち首飾り状の配置と共に、Ab1またはAcの配置の玉類が出土する例があるが、Ab1とAcまたはBbが共に出土する例はない。

引用・主要参考文献一覧

〈単行本・論文〉

- 伊藤雅文 1989「玉・石製品」『季刊考古学』第28号
- 岩永省三 1997『No.370 弥生時代の装身具』日本の美術 3 至文堂
- 小山田宏一 1995「副葬品」『季刊考古学』第52号
- 金関恕・佐原真編 1987『弥生文化の研究8 祭りと墓と装い』雄山閣
- 木下尚子 2000「装身具と権力・男女」『古代史の論点2』小学館
- 小寺智津子 2005「国家形成期の葬送にみる玉類の副葬行為」『次世代死生学論集』
- 2006「弥生時代のガラス製品の分類とその副葬に見る意味」『古文化論叢』第55集
- 清家章 1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究 考察編』
- 後藤守一 1940「古墳副葬の玉の用途に就いて」『考古学雑誌30-7』
- 崔鐘圭 2004「梨琴洞遺跡からみた松菊里文化の一断面」『福岡大学考古学論集——小田富士夫先生退職記念——』
- 設楽博記 1993「甕棺再葬墓の基礎研究」『国立歴史民俗学博物館研究報告50』
- 白石太一郎 1985「神まつりと古墳の祭祀」『国立歴史民俗学博物館研究報告7』
- 梶山林継 1972「祭と葬の分化」『國學院大學日本文化研究所紀要』第29号
- 2005「弥生・古墳時代の玉信仰」『季刊考古学』第94号
- 高倉洋彰 1999「副葬のイデオロギー」『季刊考古学』第67号
- 谷川健一 1983「古代人のカミ観念」『太陽と月 日本民俗文化体系2』小学館
- 玉城一枝 1994「古墳構築と玉使用の祭祀」博古研究第8号
- 中村大介 2006「弥生時代開始期における副葬習俗の受容」『日本考古学』第21号
- 堀宜田佳男 2005「弥生時代北部九州における葬送儀礼とその思想的背景」

『待兼山考古学論集——都出比呂志先生退任記念——』大阪大学考古学研究室編集

野島永 2000「弥生時代の対外交易と流通」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』『季刊考古学別冊』10

野島永・野々口陽子 2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（2）」『京都府埋蔵文化財情報第7号』

林巳奈夫 1999『中国古玉器総説』吉川弘文館

広瀬和雄 1997『縄文から弥生への新歴史像』角川書店

2000「副葬という行為」『季刊考古学』第70号

廣瀬時習 1995「弥生・古墳期の玉の使用形態と意義 玉副葬の歴史的展開」『文化史学』52号

福永伸哉 1995「三角縁神獣鏡の副葬配置とその意義」『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究 平成6年度科学研究費補助金（一般A）研究成果報告書』小松和彦・都出比呂志他編

藤原好二 1995「副葬品の配置と組成」『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団

北條芳隆 1990「古墳成立期における地域間の相互作用」『考古学研究』37-2

1998「弥生時代前期集団墓の構造」『庄・蔵本遺跡1』徳島大学埋蔵文化財調査室

1999「墳墓とイデオロギー」『季刊考古学』第67号

町田章 2002『研究論集——Ⅲ中国古代の葬玉』奈良文化財研究所学報第64冊 奈良文化財研究所

松木武彦 1999「副葬品からみた古墳の成立過程」『国家形成期の考古学——大阪大学考古学研究室10周年記念論集——』

溝口孝司 1999「墳墓に表された政治関係」『季刊考古学』67

茂木雅博 1997「古墳に副葬されるもの」『古文化論叢——伊達宗泰先生古稀記念論集——』

〈発掘報告書（県別）〉

京都府

赤坂今井 京都府教育委員会 2000 京都府発掘調査概報第92冊

峰山町教育委員会 2004「赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書」京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第24集

浅後谷南 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998 京都府遺跡調査概報第84冊

- 今市 大宮町教育委員会 2001 「今市古墳群・墳墓群・経塚発掘調査概報」
大宮町文化財調査報告第19集
- 大風呂南 岩滝町教育委員会 2000 「大風呂南墳墓群」 岩滝町文化財調査
報告書第15集
- 大山 丹後町教育委員会 1983 「丹後大山墳墓群」 京都府丹後町文化財調
査報告第1集
- 金谷 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 京都府遺跡調査概報第66冊
- 坂野丘 弥栄町教育委員会 1979 「坂野」 京都府弥栄町文化財調査報告第2集
- 左坂 京都府教育委員会 1994 「埋蔵文化財発掘調査概報」
大宮町教育委員会 2001 「左坂古墳（墳墓）群G支群」 京都府大宮町
文化財調査報告第20集
- 芝ヶ原 城陽市教育委員会 1987 「芝ヶ原古墳」 城陽市埋蔵文化財調査報告
書第16集
- 狭間 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001 京都府遺跡調査概報第97冊
- 日吉ヶ丘 京都府加悦町教育委員会 2005 「日吉ヶ丘遺跡」
- 古天王 京都府弥栄町教育委員会 2001 「弥栄町内遺跡発掘調査報告書」
弥栄町文化財調査報告第19集
- 三坂神社 大宮町教育委員会 1998 「三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・
有明古墳群・有明横穴群」 京都府大宮町文化財調査報告書第14集
- 兵庫県
- 上鉢山・東山 豊岡市教育委員会 1992 「上鉢山・東山墳墓群」 豊岡市文化
財調査報告書第26集
- 大篠岡・半坂 豊岡市出土文化財管理センター 1999 「とよおか発掘情報第
7号」
- 柿坪中山 兵庫県山東町教育委員会 1975 「柿坪中山古墳群」
- 香住門谷 豊岡市教育委員会 2003 「香住門谷遺跡群」 豊岡市文化財調査報
告書第34集
- 駄坂・舟隠 豊岡市教育委員会 1989 「駄坂・舟隠遺跡群」 豊岡市文化財調
査報告書第22集
- 立石 豊岡市教育委員会 1987 「北浦古墳群・立石墳墓群」
- 田能 尼崎市教育委員会 1982 「田能遺跡発掘調査報告書」 尼崎市文化財調
査報告書第15集
- 岡山県
- 鋳物師谷 春成秀爾他 1969 「備中清音村鋳物師谷1号墳墓調査報告」 古代
吉備第6集

矢簾治山 矢簾治山弥生墳丘墓発掘調査団 1995「矢簾治山弥生墳丘墓」

楯築 近藤義郎 1992「楯築弥生墳丘墓の研究」楯築刊行会

島根県

友田 松江市教育委員会 1983「松江圏都市計画事業及木土地区画整理事業
区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告」

西谷3号墓 渡辺貞幸他 1992「西谷墳墓群の調査(1)」『山陰地方におけ
る弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室

福岡県

立岩 藤田等 1977「立岩遺跡」河出書房新社

門田辻田 福岡県教育委員会 1978 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第
9集

佐賀県

二塚山 佐賀県教育委員会 1979「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集

長崎県

中野ノ辻 田平町教育委員会 1992「中野ノ辻遺跡」田平町文化財調査報告
書第6集

韓国

昌原三東洞 釜山女子大学校博物館 1984「昌原三東洞甕棺墓」釜山女子大
学校博物館遺蹟調査報告第1輯

〈図の出典〉

図1 1渡辺貞行他1992、2近藤義郎1992

図2 1・2大宮町教育委員会1998

図3 1藤田等1977、2峰山町教育委員会2004

図4 1京都府加悦町教育委員会2005、2大宮町教育委員会1998

図5 1大宮町教育委員会2001、2豊岡町教育委員会2003

図6 1矢簾治山弥生墳丘墓発掘調査団1995、2丹後町教育委員会1983

図7 1豊岡市教育委員会1992、2佐賀県教育委員会1979

(以上、全て報告書より転載)

(こてら・ちづこ 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)

The magical use of beads for burial and its background in the Yayoi period

Chizuko Kotera

It is the custom observed widely from the prehistoric age to bury the dead with something memorial, spiritual, and/or magical. These grave-goods, their assortments, their layouts, and their burial manners are one of the most useful materials in studying the death concepts of the people in each period. It was also the fact in ancient Japan.

Through the Jomon, Yayoi and Kofun period, these grave-goods were generally beads. People of these periods used the beads not only as personal adornments but also as ritual goods, for they found magical powers in these beads. The burial beads can be considered reflecting the concepts of death of the above periods vividly.

In the Yayoi period, which this paper deals with, the manners of laying the grave-goods became diversified as the progress of the social formation. This means that the frame of mind of the people about the dead came to be more diversified. In this stream, the ritual and magical use of the beads got popular. This paper, after recapitulating characteristics and tendencies of the manners of laying beads in the Yayoi period, picking out some patterns of the layout of the beads, and examining their intentions, aims at analyzing the frame of mind of the people in this era about the dead laying behind these burial deeds.